

の悪宣傳を一蹴す

會社の言に従へば、「所謂九三問題は決して之のみに依り罷工をなす程の重大なる性質を持つて居りませぬ」そうでありませぬが、之は世の何人もが信する如く、百余名の人の失業と、夫によりて直ちに生活の脅威を受ける四百余名の家族のあることを見る時に、夫が重大なる性質を持つものでなくて、何か重大と云ひ得るだらうか？人間の死活に關する問題が重大でないとは、野田醬油の重役等によつてはじめの放言し得る處で、人間社會の他の何人とも雖も斯る出鱈目を云ふ勇氣は持ち合はずまい

次に(2)の「經營參加云々」の事だが、我々の信する所に依れば、労働者が其從事する産業に參畫して、所謂「産業の立憲化」を計ることは時代の趨勢であつて、之を政治に徴するならば古代の封建政治、專制政治より今日の立憲政体に迄進化したものと些々たる相違もないのである。現に、群馬縣大間々町の岡興工場が如き、或は日本製鋼株式會社及岡部電氣株式會社の如き、完全に職工をして其事業の經營に參加せしめて、而も隆々として發展しつゝある状態を見るのである。若し此時代の風潮を無視して永遠に昔ながらの專制的制度を持続せんとするならば、夫は實に産業の發達を阻害する暴漢であらう。社會進化を解せざる痴漢である。之を野田醬油に就いて見るならば、事業の經營から遠ざけんとするは、夫は即ち醬油屋者時代に引戻さんとする一時代の逆行せんとする頑迷固陋なる愚策である。既に我々は、大正十二年の爭議以來、常に労働條件の總てに就て、事實上(近くは十工場の諸味出の如く或は一工及四工の桶工問題の如く)參加して居るのであつて、今頃あらたまつて彼此云ふのは寧ろ骨節事に屬する。

(3)の「保留の復活……」に就いては、先に罷工決行の理由として九三の問題が重要な意義を有する事を闡明した以上、また既に聲明書に依つてお知らせしたので、會社の想像云々などは最早論ずる必要がないと思ふ。我々が保留案を復活したのは、此際は一過に片づけて仕舞ひたいとの念慮からしたに過ぎないのであつて、全く他意あるわけではない。夫が重役まで通じてゐるかどうかは知らぬが、保留案については會社のピラに表はれて居るが如き意志を我々が持つて居ない事は、少くとも並木工場課長にはハッキリと判つてゐる筈だ。

(4)の「要求拒絶の理由」については、次の項に於て要点をわけて言明されてゐるから、夫に譲るをとする。

二は既に述べた通り、本月三日に頒布した宣傳文——要求拒絶の理由——の要点であるが、こゝに面白い事は、吾々の要求は全部で八ヶ項、即ち、

- 一、從來通り會社の荷を九三に取扱はしむること
- 二、賃銀の一割増給但し女工は二割とする
- 三、解雇、老衰、退職手當支給率は、從來の率に、勤続二ヶ月に就き日給一日分を加算すること
- 四、桶工徒弟は、各工場に於て一名乃至二名を桶工會員の責任を以て養成すること
- 五、年末賞與の最低額を、日給一ヶ月分と定むること

七、日雇工に對し、工具扶助規定を適用すること

八、団体協約の設定

之を容認する意志あるもの、如く、只第二項の賃銀値上と第八項の団体協約の事にのみ言及してゐる事である。若し會社が左様な御意志であるとすれば、之は誠に、結構な次第である。兎に角、要求拒絶の第一の理由から吟味して行かう。

(1)の賃銀安からすと云ふ會社の一字一画を見ても、知らぬ人は成程と首肯するかも知れぬが、我々は呆れて物が云へない。一圓八十六錢四厘と云ふのは定額にあらざらず平均したものではないか、我々に云はしむるならば、其平均日給がたとへ何圓であらうと夫が個々人の生活と何の關係があるか、桶工の本人格の者は二圓五十錢の日給を得るとしても、日給七十錢の女工の生活を何うすることも出来ぬのは何人も知る所だ。會社は幾度となく繰返へして實収入二圓十五錢と云ふが、思ふても見よ！千六百余名中二圓以上の賃銀を得る者は二百十九名の僅かではなにか、此外に醸造工の四百八十五名は二圓の日給を得るのだが、残る八百余名の者は云々までもなく半端日給で仕事だけ一人前の作業分量を課せられてゐるのである。また會社は、時間云々を宣傳されてゐるが、大正十二年の罷工が何の爲に起つたかを、胸に手を當て、靜かに考へて見れば直ぐ判る事だ。從つて夫と賃銀を比較して云々するなどは、自分よがりの勝手な言ひ分で、狂人の癡言に等しきものである。之は會社に云ふことだが、齋藤知事閣下を煩はして調停の行り直しを頼んでは如何なものだ。

次に(2)の脱出作業の強請の事だが、是などは心ある者をしてひん縮せしむる暴言である見よ！人間が一人前の仕事を、生活費の不足を訴へて賃銀値上げを要求したるに對し、夫では二人前も働いて食へど云ふ此薄情さを、要するに會社は賃銀を上げれば仕事を増すと云ふのだが、此會社の理論が正しとせば、此後如何に物價が騰貴し、或は他に負担が増す(例へば健康保險法の實施による負担の如く)とも、現在の作業分量のまゝでは賃銀は上がらぬわけである。乍然、苟くも現在の作業分量は、大正十二年の爭議に於て、三ヶ月間の實驗の結果双方の承認により決定したもので殆んど絶對的のものである。されば、之以上の分量を課さんとするは其協定を覆さんとするものであるばかりでなく、更に、人道上からも憂々しき問題である。

(3)の會社の利益に關しては如何に圖々しい重役も、道が嘘を云へないと思へて白状してゐる。然り、誠に會社の白狀の如く現在の如き不況時代と稱せらるゝ時に於ても尙巨額の利益を得てゐるのだ。さればこそ我々は賃銀の値上も、其他の要求も提出し得るのだ。會社の二ヶ月もかゝつて抱りあげた貸借對照表によつてさへ、二百六十余万の繰越金や、數十万の純益があるのだから、我々の要求を其虚構呑みにしても僅かに十五万に満たぬのを見れば、理の判る重役であるならば、問題は直ちに解決してゐるわけである。

對照して、組合の要求を拒絶する明確なる理由を持つと云ふが、夫は我々組合員が十七工流山の工員より劣等であると云ふ事らしい。乍然會社が如何に言葉飾つて繕ふとも事實は之を如何ともする事が出来ない。かの昨年の十七工場の諸味の成績は如何？昨年未各工場の主任及監督から、十七工場と各工場の差別について追求された時、重役及並木工場課長等は何と答へたか？我々は自分の人格的存在について多くを語りたくないが、仮りに我々が労働組合に加入して以來龜甲万の弊價を低下させた事實があるならば、我々は首を取られても苦しくない、また、社會人としての資格に於て、組合加入以前の醬油屋者時代に比して、向上してこそ居れ低下しない事の自信を有つものである。流山や十七工場の工員の如く、權利と義務の區別を辨へず、恰如隸の如く只屈從する事以外心得ざる徒輩と比較される事をば我々は、あまり名譽と心得ない。

最後に、(5)の労働者が横着だと云ふ爲には「額に汗せずして食はんとする……」云々へ、更に言をつづけて「痴人の夢を語るに一般なり」とまで極言してゐるが、如斯は、實に我々組合員を侮辱する甚だしきものである。我々二千の組合員中只の二人でも、働かざれば食はんと企てた者があるか？前にも述べた通り七十錢位の半端日給で而も一人前の仕事を課せられる様な課間化をされてこそ居れば、茂木佐常務等の如く、官吏に贈賄して不正の利益を得ようとする謀計を立て得る會社の人々と違つて、我々は勞せずして他人の財を取得せんとするが如き勇氣を持合せないの不幸に思ふ。以上によつて、要點に關する反駁は済んだ。序に、體面に表はれてゐる會社の暴言に對して一矢を取りは會社の方が得意だから、會社に一任して置く。

四、

前述の如く、會社は思ひ切つて我々に罵聲諷刺を浴せてゐるが、夫と他の、たとへば解雇通知を發したる者の姓名を門前に貼り出したこと、或は組合員の家族や町の有志に宛てた手紙等の政策を綜合するならば、會社は労働組合を破壊するのと同時に、我々が再び社會に立つ能はざるまでに陥れんとする惡辣極まる奸策であることが判る。乍併、若し會社にして眞に爭議解決後までも我々を苦しめんと策するならば、我々も夫に相應しい對策を講ずること知らぬのではない。我々を全く地に壓しつけて仕舞ふとするのであれば、我々も覺悟せねばならぬ、此点は、猶鼠猫を噛むの古智に學ばずとも判るだらうに、迂愚なる重役にも困つたものと思ふ。

現在の我々は、可及的早く爭議を解決して町内は勿論、廣く社會の迷惑と不安とを一掃すべく、然るべく方針の下に進みつゝあるのであるが、會社が飽くまでも我々を苦しめんとするならば、我々も一管の筆により、一枚の半紙によつて、會社が後にまで悩まねばならぬ政策を施すことを躊躇する者ではない。然し、我々は後は野となれ山となれと云ふが如き自棄氣分は絶対に起したくない、否起してはならぬ事を知つてゐるから、今は一層自重して、次の瞬間の重役の態度に全体の注意を集中してゐるわけでありませぬ。